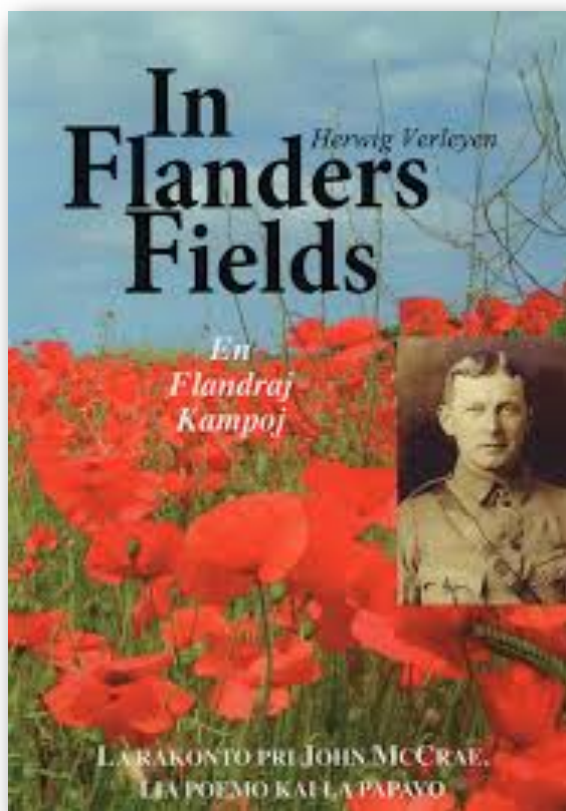


In Flanders Fields/En Flandraj Kampoj

verkita de Herwig Verleyen
eldonita de Flandra Esperanto-Ligo, 2014
70 paĝoj

昨年、Monato で“*In Flanders Fields*” (“*En Flandraj Kampoj*”) という本の広告を何度か見かけた。表題になっている“*In Flanders Fields*”（「フランダースの野に」）は、第一次世界大戦から生まれた最も有名な詩だそう。私はこの詩についても、作者のジョン・マクレーについても全く知らなかったが、気になって入手、一読し感動したので、本書の内容や感想を記してみたい。なお、この詩が生まれたイーブルは、昨年の世界大会の開催地であるルールに近い、ベルギーのフランドル地方の都市である。

本書の原著はブリュージュ在住の著者によってオランダ語で書かれ、1992年に刊行、本書は、Lode Van



de Velde の手になるそのエスペラント訳である。マクレーの経歴、上記の詩が生まれた経緯、その後の反響などが簡潔に記述されている。また、十字架や墓碑が立ち並ぶ戦没者墓地や、当時の塹壕などの写真が多数掲載されていて、深い感慨に誘われる。第一次世界大戦は日本人にはなじみが少ないが、ヨーロッパ諸国を巻き込み、甚大な被害を生み、次代を担う若者たちを次々と倒した「大戦争」（the Great War）であった。

さて、マクレーは1872年に、当時イギリスの自治領だったカナダに生まれ、大戦では軍医として働き、1918年に戦病死した。1914年8月、ドイツ軍がパリを攻略するためベルギーに侵略し、以来、イーブル近郊で3度にわたりイギリス軍を中心とする連合軍と激しい戦いを繰り広げた。1915年4月、ドイツ軍が初めて毒ガスを使用したことで知られる第2次イーブルの戦いの際、彼は野戦病院で負傷者の治療に当たっていた。年少の友人が戦死して、その葬儀を済ま

せたのちの5月3日に書いたとされるのが“*In Flanders Fields*”で、1916年1月8日にイギリスの週刊誌『パンチ』に掲載されるや、その修辞の力によって兵士たちやその家族たちの絶大な共感を呼び、イギリス、イギリス連邦、アメリカなどで有名になった。

この詩の語り手は死者である。ここでは全部を引用する紙幅がないが（原詩はインターネットで検索すれば容易に見つけることができる）、彼は「ぼくたちは数日前には生きていて、夜明けを感じ、夕日を眺め、愛し、愛されたのに、今ではフランダースの野に横たわっている。（中略）君たちがぼくたちとの約束を守ってくれないなら、ぼくたちは眠れない」と訴える。それでは、その約束とは何か。自分たちを殺した敵に勝利してほしいということなのか。実際、この詩は発表後、戦意高揚、あるいは戦費調達のためのプロパガンダとして大いに利用されたそうである。

しかし、当然ながら、そのように利用されたからといって、作者の真意もそこにあったとは即断できない。とりわけ問題になるのは第三連の冒頭で、原詩では、“*Take up our quarrel with the foe*”とあるところを本書では“*Malamikojn sendu al la morto*”と訳している。これに対して、小沼通二は、この箇所作者の隠された思いを見てとり、「敵との戦いを終わりにしよう」と訳している（「戦死者を偲ぶ」、『凶書』2015年11月号）。いずれの解釈が正しいのか、作者がひそかに両義的な意味合いを込めて書いたのか、私には判断できないが、人生の半ばで生を断ち切られた者の無念を、読者がそれぞれの観点から受け止め、解釈することは許されるだろうと思う。

イープルは激戦地の代名詞となり、人々に大きな衝撃を与えた。この詩は、戦いのあと、血のように赤いヒナゲシの花が地表を埋め尽くし、そのあいだに戦死者の無数の墓標が立ち並ぶ情景を描いている。この詩に感動して、アメリカ、イギリス、イギリス連邦では、1921年から11月11日の戦没者追悼記念日に造花のヒナゲシを胸につける慣わしとなり、この日もポピー・デイと呼ばれるようになった。そうした経過も本書で知ることができる。

第一次世界大戦から百年以上が経過した現在でもなお戦争はなくなり、世界のあちこちで無数の人々が理不尽に殺戮されている。本書を読みながら、私はそうした無数の死者たちの無言のまなざしを強く感じた。軍事用語や、なじみの少ない史実、地名が頻出するため、読みやすいとはいえないが、それでも本書がエスペラントで読めるのは幸いである。なお、本書には、訳者によるこの詩の訳とともに、2009年にアメリカの雑誌に掲載された4人の翻訳者によるエスペラント訳も収録されていて、原詩と比較対照すると興味深い。

(La Movado 2016年6月号掲載。なお、転載にあたって一部表現を改めた。)

(追記)

1 津田博司「フランダースの赤いポピー」(藤原達史編『第一次世界大戦を考える』(共和国、2016)所収)は、フランダースの赤いポピーが戦没者追悼のシンボルとして普及していったプロセスを紹介している。当時、イギリスの植民地であったカナダのイギリス系カナダ人たちが、いかにイギリス帝国に対する強い帰属意識を持ち、「母国」のために「帝国の総力戦」を戦ったかが語られていて興味深い。

2 2枚目の画像は、イギリス在郷軍人会が制作した戦没者追悼記念日のポスター。マクレーの詩の最後の3行が引用されている。

If ye break faith with us who die /
We shall not sleep, though poppies
grow / In Flanders Fields

(「死んだぼくたちとの約束を守れないなら／ぼくたちは眠れない、ポピーの花が／フランダースの野に咲き誇っても」(小沼通二訳による)。

